

Isekai de Taida na Inaka LIFE.

異世界で 怠惰な 田舎ライフ。



Taiyo kureha

太	陽	ク	レ	ハ
---	---	---	---	---

登場人物紹介

characters

レーナ・ロンアームス

ニールの妹。趣味はリバーシ。
負けず嫌い。

ニール・ロンアームス

ロンアームス伯爵家四男。
【剣聖】のスキルを持つ。
真面目な優等生だが、シスコン。

リム

リコロ村の村人。
頑張り屋さん。
ユリーの友達
だったが……。

ローラ

ユリーの母親代わりの
メイドさん。
何よりもユリーが
大切で弟のようにも
思っている。

ユリー・ガートリン

【超絶】のスキルを持って、
異世界に転生した本作の主人公。
全てにおいてやる気がない。

ディラン

ユリーの父、
ガートリン男爵の
警護を担当する
元冒険者。
ユリーを鍛える。

フロローグ

『怠惰』

これは、俺——岡崎椿を説明する時に一番しつくりくる言葉だと思う。

友人に俺の特徴について聞いたら、口を揃えてそう言う。俺の口癖は、「普通でいい」と「面倒くさい」だし、学校の授業ではボーッとしているか、ダラダラしているか、寝ていたので間違っていないと思う。

そんな俺について、優等生である幼馴染みはいつもこう言っていた。

「ツバキはやる気にさえなれば、すぐく出来る子なのに……」

毎度、俺は「おまえは、俺の母ちゃんか」と突っ込んでいた訳だが。

とはいえ、怠惰になる以前……子供の頃は色々やっていたと思う。

スポーツも勉強も人並みには頑張っていたけれど、まさしく井の中の蛙大海を知らずつてやつ。

小さなコミュニティの中では優秀だったが……競争相手が増えるにつれ、何もかも中途半端になっちゃった。

その結果、中途半端にやるくらいなら……怠惰にすごしたいと思うようになったのである。

多分、そう生きざるを得ないことの言い訳にすぎないけど。

まあ、そこら辺の経緯はどうでもいいか……。

そんな、俺だが……十分くらい前だろうか？ 死んだ。

まあ……正確には死んだようだ、というのが正しいのかもしれない。

高校に登校する途中の出来事だった。

幼馴染みと歩いていた時、トラックがガソリンスタンドに猛スピードで突っ込んでいくのが見えたので、爆風から咄嗟に幼馴染みを庇おうとしたのが俺の最後の記憶。

そして、死んだはずの俺は今、見渡す限り真っ白い空間にいた。

「ここは何処？」

確かに死んだはずなのだが……状況が呑み込めない。

『ここか？ ここは、お主ら人間が天国と言っている場所かの。そして、儂が神と言われている存在じゃ』

声のする方を振り向くと、白い服を着た老人が立っていた。

「へえ、ここが天国ですか。じゃ……俺は死んだんですか？」

『そうじゃな、事故に巻き込まれたようじゃの』

「……。それで、これからどうしたらいいですか？」

『それは……ってお主、何ゆえ、そんなに冷静なんじゃ？ 普通、死んだと分かったならば、誰でも取り乱すもんじゃと思うが』

「面倒くさいんで、そういうのいいです。あ……一つだけ聞いていいですか？ 俺が死ぬ間際に側にいた幼馴染みはどうなりましたか？」

『うむ、お主と同じ結果じゃ』

やっぱり、助けられなかったか……。あの爆発じゃ無理もない。

もう少しなんとか出来たかもしれないけれど……まあ、今更か。

「幼馴染みのことは残念ですが……もう終わってしまったことですし……分かりました。話を進めてください」

『うむ……そうか。では……これからお主には、異世界に転生してもらいたいんじゃ』

「異世界ですか？」

『随分と反応が薄いのがう』

自称神様の爺さんは、ちよつと顔を顰めている。

俺に驚いたり慌てたりするようなりアクションを求められても、困るだけだな。

そういう反応って、疲れるからしたくないんだよね。

何ていうか、面倒だし……。

「……すみませんね」

『まあ、いいかの。それでの、これからお主には……』

「あの……少し、質問してもいいですか？」

『なんじゃ？』

「なんで……そんな別の世界に転生するような面倒なことを俺がしないといけないんです？　そもそも、毎回人が死んだら、こんなゲームのチュートリアルみたいなことをしているんですか？　面倒くさくないですか？　想像しただけで嫌になる……。もし俺が神様なら、死んだ世界の中でランダムに転生するシステムを最初に作って……後は傍観者を気取りますが」

思っていたことを一気に告げると、爺さんは笑いながら応じた。

『そうじゃの。そういう仕組みは今もそれぞれの世界で起動中じゃ。お主が言う通り、普通ならこんなことはしないのじゃが……。お主が遭遇したトラック事故じゃがな、あれはまあ……。儂の手違いというか……。お主の運命から外れた……。本来なら起こるはずのなかった事故なんじゃ』

ん？　何か途中でやたら声が小さくなったけど、手違いとか、運命から外れたとか言わなかったか？

『それでの、あの事故に巻き込まれたことで運命が変わって死んだ者は、システムから外れた……。逸脱者として世界に変革をもたらす力があると儂は考えたのじゃよ。そこでなんじゃが……。これからお主に行ってもらう世界はのう、儂も理由が分かんのだが……。二十六年後のある日、突然、崩壊するみたいなんじゃよ。今までも、その予言を回避するために色々とその世界に介入を試みてき

たが、無駄じゃった。未来予測が変わらんのじゃ。そこで……。お主には、異世界が崩壊する原因を探って欲しいのじゃ』

「え……。俺が？　なんで……。？　てか、二十六年後に崩壊することが決まっている世界に送らないで欲しいんですけど……。』

そんなの、わざわざ死に行くようなものじゃないか。

『確かに、崩壊することが分かっている世界に飛ばすのは、酷な仕打ちかもしれないが……。お主はさっきの事故で死んでいる。なので、いわばポーンステージと考えて欲しいのじゃが』

「……ふざけているんですか？　死の痛みを二度も味わうなんて、ポーンステージでも何でもないでしょう」

『うむ……。確かにの。これは、儂の配慮不足じゃった。そうじゃの……。異世界を崩壊の危機から救ったあかつきには、お主の願いを一つだけ叶えてやるかのう』

めんど……。

『面倒って思っとるじゃろ？』

「……」

く、なんで、俺なんだ？

俺は田舎でのお主だらりと暮らしたいだけなのに。

『田舎で怠惰に暮らしたいと思っとるじゃろ？』

「いえ」

なんだこの爺さん……俺の心を読めんの？

『まあ……無理には言わん。お主のような性格だと、これから行く世界は生きていくだけでも厳しそうじゃからの』

そう言うやいなや自称神様の爺さんは、何やら呟きながらおもむろに手を上げる。
すると爺さんの胸の辺りに、何十枚もの黒色のカードが浮かび上がった。

『こちらもお願ひしている身じゃ。何も与えずに放り出すようなことはせぬよ』

「これは……？」

『これは才能……【スキル】と言った方がしっくりくるかの。ここに浮かんでいる数百枚のカードは、数億あるスキルの中からランダムに選ばれたものじゃ。この中から選り取った一枚を転生先で使えるようにしてやろう』

スキル？ そんなのがあるの？

「例えば、どんなスキルがあるんですか？」

『剣術（大・中・小）】は一般的かの。剣での戦いにおいて優位に立つことが可能になるスキルじゃ。ちなみに大・中・小とは効果の大きさを示しておるの』

はあ……まあそういう便利なスキルがもらえるなら……依頼は受けてもいいか……。

「……俺が出来る範囲での調査でいいですか？ といっても、テキトーにしかやりませんよ？」

『構わんよ。それで、世界が崩壊したなら……そういう運命じゃな』

しかし、調査するにしても、二十六年つてのは短い。

短すぎるぞ。

「もう一つお聞かせ下さい。もし、俺がやらなかったら……どうなります？」

『その場合は、死ぬだけじゃな。全ての記憶を失って生まれ変わる』

「ええ……それも嫌だなあ……」

『ほれ、早く選ぶんじゃ！』

「……分かりましたよ。もう。本当にテキトーにしかやりませんよ……？ それじゃ、この中から選んでも？」

『構わん』

これにするかと一番近くにあったカードを選び取ると、カードの表面がペリペリと剥がれていく。そこには見たことのない模様の文字がびっしりと刻まれていた。

『ほう……よいスキルを引いたの。まさか、そんなレアなものが出るとはもう』

「このスキルは、どういうものなんですか？」

『スキル名は【超絶】じゃな。常時発動型で全ての能力と成長率が上昇するスキルじゃな。上昇率は……スキルレベルにもよるが、だいたい2〜4倍というところかの』

なんだその数字!? つまり、レベルが上がれば上がるほど超人化するってことなんじゃ……？

「それって、すごく目立ったりするやつ……」

『ふおふお、使いこなせれば、世界に変革をもたらすくらいには目立つスキルじゃな。めっちゃレアなスキルじゃよ。ふむ……お主がこれからどう生きていくかに興味が湧いてきたの。このようなスキルを持つてなお、怠惰に生きていけるか見ものじゃて。圧倒的な力なんてのは、隠すのが難しいからの。ふおふおふお』

「……返却や交換は可能でしょうか？」

『不可能じゃ。さあ行くがよい。新たな旅立ちの時じゃ。それと言語対応スキルは餞別^{せんべつ}じゃて』
「ちよ、ま……」

白い光が湧き上がり、俺を包み込んだところで意識を失った。



「産まれたのか……」

ん？ なんだ？

俺は、小さな女の子とともに、ウェーブのかかった金髪の美女に抱きかかえられている。

そんな俺達を難しい顔で覗き込むのは、あご髭をたくわえたダンディーな男性。

「はい。すみません……。ただ、あなたの子を産みたくて……」

「そうか。そうだな」

「……私は、午後の乗り合い馬車で別の街に行き……そこでひっそりと暮らそうと思っており
ます」

「……！ それは、ダメだ。お前を愛している。私の妻になれ」

「しかし、私では……。あなた様のご迷惑に……。私は、今の言葉だけで……。もう何も……」

「お前はいい女すぎる……。確かに、お前が今の私といっても幸せになれないかもしれん。だが、お前と子供、両方を失うのは……。つらすぎる。やはり考えなおしてくれないか？」

「……私がここに残れば、あなた様のお立場が悪くなるはずだ。しかし……。確かに、私に育てられるよりも、貴族であるあなたのとこで育てられた方が……。この子にとっては幸せでしょう……。この子をあなたにお任せします。よろしく願います」

第一話 異世界には魔法があった。

異世界に転生してから、一年が経った。

徐々にだけど、俺は自分が置かれた状況を理解し始めている。

この異世界での、俺の名前はユーリ・ガートリン。

母の顔はほとんど覚えていない。名前はリーナというらしく、父専属のメイドであったようだ。いつか会ってみたいけれど、居場所が分からないのでどうしようもない。

父は、ディアス・ガートリン。ガートリン男爵家の当主だ。

経営している領地の広さは東京都と同じくらいで、千五百人くらいの人が住んでいる街とその周辺の村を管理しているらしい。王都からも遠く、これといった産業もない。

つまるところ、田舎である。

そして俺は、男爵家の養子だ。生まれてから今まで、俺は屋敷の別館から出たことがなく、メイドに育てられている。

立場としては三男。兄が二人で姉妹はいない。

この兄達は、正妻さんの子供らしい。

らしい、というのは、俺が正妻や二人の兄に会ったことがなく、話に聞いただけからだ。

ちなみに正妻さんや兄たちだけど、メイド達の噂によると、かなり傲慢な性格で屋敷の人達も困っているとか。

まあ……俺には関係ないんだけどね。

そんなことより今は……何よりも昼寝したい。眠いので。

「はふ。ねむ」

ずっと、寝ていることが許されるのは最高だなあ。

ベッドに潜り込むと、俺専属のメイドであるローラが優しく布団をかけなおしてくれた。

彼女は親代わりで、色々俺の面倒を見てくれている。

歳は十五〜十六歳くらいかな？ 女性の年齢は分かん。

しっかり者の美人さんで青い目が印象的。赤みがかった金髪を後ろで一つに纏まとめている。

「ユーリ様は、お昼寝が好きですねえ。本当に手のかからないお子様で……少しだけ心配なくらいです。まあ、早くから立って歩けるようになりましたし、問題ないと思います……。さすがはリーナ様のお子様と言うことですかね？」

「あ、ろーら、ほん」

「ハイハイ、本ですね。今日は、三人の英雄様のお話にしますか。ではでは、昔々ある王国が魔物により……」

うう……最高だぜ。布団でダラダラしながら、本を読み聞かせてもらえる。素晴らしいな。

昔読んだ異世界もののラノベだと、子供の頃から主人公がすぐ頑張っていたけどさ。

魔法とか？ 商品開発とか？

確かに、お金は大事だし、沢山持っているに越したことはないけどね。

一度死んだ人間として言わせてもらえば、お金はあの世に持っていけない訳だし。

チートのな力や知識を持っているために仕事に追われたりするくらいなら、ちよいちよいと稼ぎつつ、どっかの田舎でグダグダのぐうたら暮らしをするのが一番だと思っただよなあ。

俺の考えはおかしいのだろうか？

とりあえず、今から二十五年後に異世界が崩壊してどうたらとか、神様が言っていたので、ほどほどには頑張るけど……今の俺は何も出来ないで昼寝が最優先だな。

まあ、人類滅亡に関係しそうなこと以外は何もする気はない。

とはいえ……神様からもらった【超絶】というスキルがぶっ壊れすぎなので、変な厄介事に巻き込まれそうな予感はある。

そうなる、だ。

……とりあえずは、スキルを隠したいなあ。このチートスキルがバレるのは避けたい。

力を隠せるスキルとかアイテムとかないかな？

あと、自分のレベルを上げたくない。経験値を稼がないように、ぐうたら生活をしないと……。

『【超絶】のレベルが4から5に上がりました』

ああ……また、これだ。

ここ数ヶ月で何となく理解したんだけど、スキルというものは繰り返し使うことでレベルが上がる仕組みのようだった。

そこで問題なのが、【超絶】の仕様である。

このスキル……常に発動しているので、俺がダラダラしているだけでも勝手にスキルレベルが上昇してしまうのだ。今の時点でも、気づくと上がっているから、なんとかしないと。

ステータスオープンと心の中で唱えると……。

ユーリ・ガートリン レベル1

H P 62 / 62 M P 90 / 90

攻撃力 130 防御力 105

スキル 【超絶レベル5】【言語対応レベル5】

魔法 【水魔法（小）レベル1】

俺個人のレベルは上がってないのに、スキルレベルだけ上がってしまったている。

さらに【超絶】のスキルレベルが上がると、基礎能力も上昇するようだ。

しかも、常にスキルを使っているにもかかわらず、HPやMPは減らない。今のところリスクがなさそうなのも恐ろしい。

ちなみに、【水魔法（小）レベル1】は、この異世界に魔法があることを知って軽い気持ちで念じたら覚えてしまった。

手から水が出てくるイメージを思い浮かべてみただけで、結構簡単に立ちやってベッドが水浸しになってしまったのだ。まるで俺が漏らしたみたいで、恥ずかしかったのを覚えている。

その時以来……魔法を使ってレベルが上がったりしたら嫌なので、使っていない。

ま、今知りたいのは『どうしたら経験値を得たり蓄積したりしないように出来るか』ってこと、あるいは、『力を隠すスキルはどうしたら手に入るのか』ってことだし、魔法にはあまり興味がない。

ふはあ……。眠くなってきた。

少し寝ようかと思った、その時……。

——ドタドタドタ、バン！

「ここか？ 汚い血が混ざっている奴がいるのは！」

「おお、このようですね。バズお兄様。ハハ……まあ、汚い血の奴はこのような寂れた別館にいるのが、お似合いではないですか」

いきなり汚い血とか、こいつら何者なんだ？ それに汚い血つてのは……ああ、俺の母さんが平民のメイドだからかな？

「ハハ、確かに、その通りだな。カールよ」

バズと呼ばれたガタイだけよくて頭の悪そうな奴と、カールと呼ばれた身長が低く、手足も短い奴がズカズカと俺のいる部屋に入ってくる。

多分、この頭の悪そうな奴らが噂の兄なんだろう。

なんというか、すごく残念である。

それに面倒だなあ。さっさと帰ってくれないかなあ。

「どのようなご用件でしょうか？ バズ様、カール様……ユーリ様は今、お眠りになったばかりなのです。そっとしておいていただけるとありがたいのですが……」

ローラが二人の馬鹿兄にそれとなく注意する。

「メイドよ。下賤の者の血が混ざったような奴に、様を付ける必要などない。高貴な存在である我々が、わざわざ来てやったのだ。起きぬか。ほら」

バズとかいう方が俺の布団をグイグイと引っ張る。

俺のボーッとする時間を奪おうなんざ、いい度胸だな。

「おい、バズお兄様がわざわざ来ているのだ。起きろ！」

今度はカールと呼ばれていた方が、俺の髪の毛を思いつき引っ張った。

おい、コラ！ 引っ張るな！ 痛いだろうが！

よし、いい度胸だ。俺の睨りを妨げた報いを受けるがいい。

魔法を使うか……？ しかし、俺の力がバレルのは嫌だし、ローラに迷惑をかけたくないな。となると、バレないような魔法を使うしかない。

この馬鹿兄二人を気絶させる魔法とか……気絶……スタンガンみたいに電気をあてて……。

んゝこれだと、勘のいい人は俺が何かしたって分かるかもしれない。

そうだ。単純にこいつらの体調を悪くして、部屋から追い出せばいい。

例えばお腹を壊すような……あつ、便意をもよおさせるだけでも。

んゝ人間の身体なんてほとんどが水だし、水魔法を応用すればなんとか出来るかもしれない。

まあ俺を怒らせた訳だから、最悪、失敗してもいいだろ。

俺は布団を引っ張っていた二人の兄の手を握ると、水魔法をイメージしつつ兄二人の身体に魔力を流していく。

すると、すぐさま、兄二人に影響が現れた。

グルグルグル……。

「う……ここは……私には空気が悪いみたいだよ」

「う……確かに、そのようですね」

顔を青くした兄二人がお腹を押さえつつ、内股で競うようにして部屋を出ていった。

部屋にはキョトンとした表情を浮かべるローラと俺だけ。

はあ……。これで、存分にダラダラ出来る。

『レベルが1から2に上がりました』

『【隠匿】を取得しました』

『【水魔法（小）】のレベルが1から2に上がりました』

しまった……。とりあえず、ステータスオープン。

ユーリ・ガートリン レベル2

HP 110／110 MP 170／189

攻撃力 250 防御力 201

スキル 【超絶レベル5】 【言語対応レベル5】 【隠匿レベル1】

魔法 【水魔法（小）レベル2】

俺の身体は兄二人を倒したと認識したのだろうか？
やってしまった……。

まさか、こんなことでレベルが上がるとは思わなかった。

それにしても、このステータスの上がり方はおかしい。

全ての値が軒並み上昇しているんですが……。

この世界だとみんな、これくらい成長するんだろうか？

例えば、攻撃力がすでに三桁に乗っている。

これはおかしいんじゃないの？ 俺のやっていたゲームとかだと、レベル1って攻撃力10くらいなんだけど。

それと、さり気なく取得していたけれど【隠匿】ってスキルは何だろうか？

言葉の意味をそのまま受け取るならば、見つかったらヤバイものを隠すスキルのはずだが、それなら俺のスキルや能力を隠せるようになるんだろうか。

うーむ、分らん。

……ふは……ねむ……もう考えるのも面倒いなあ。

とりあえずレベルが上がってしまったのは仕方ないとして、【隠匿】ってスキルが手に入ったことを喜べばいいかな？

……それでは、おやすみなさい。

◆ その頃、男爵家の本館にあるトイレでは、二人の男が陰謀を企てていた。

グルグルグル……グルグルグル……。

「あイタタタ。なんで急に腹痛が……」

「うう……バズお兄様……。私もです。やはり、あの別館……。我らのような高貴な者には空気が合わないのかもしれない」

「イタタ……。決めたぞ。私が当主になったら、別館は取り壊して……あの汚らしい者を追い出してくれるわ。イタタタ」

「うう……わ、私も協力しますう……お兄様、早く出てください！」

◆ バズとカールの二人はこの日、一晩中、トイレに籠もることになったのだった。

異世界に転生して、二年が経った。

二歳になると、一日中ぐうたら昼寝しているのはよくないと思ったのか、ローラが俺を別館の庭先まで連れて出ることが多くなった。

今も庭先に引つ張り出されている訳なんだけど、怠^{だる}いので芝生に寝っ転がっている。

そんな俺の様子を少し離れて見ているローラは、とても心配そう。

もしかして、俺が病気なんじゃないかと考えているのでは？

ちなみに俺がこうしているのは面倒だからとか、昼寝したいからってだけではない。

注意しないと、すぐにレベルが上がってステータスがとんでもないことになるからである。

ローラにそれとなく聞いたところ、一般成人男性のHPやMPの値は、数百ちよいつてところらしい。

つまり、俺は二歳にして一般の成人男性の域を越えているってことになる。

世界の崩壊を回避できたあかつきには、田舎でのんびんだらりとした生活を送りたい俺は、危機感を覚えずにはいられなかった。

ただ、そんな願いも虚^{むな}しく……。

例えば、本を読んだだけで『超絶』のレベルが5から6に上がりました』という具合で、どんなレベルが上がってしまうのだった。

この前も、馬鹿兄二人が絡んできたので魔法を使って撃退したところ、水魔法のレベルが上がっ

てしまった。

このままだと、三歳には水魔法を極めてしまいそうなので、色々と注意している。

しかし、この腹痛魔法はかなり使えるかもしれない。

トイレに駆け込^かんで呻^{うめ}き声をあげている兄達がおもしろ……いや……この魔法が戦闘で使えそうだからである。

どんな強者であっても、身体の中を強くするつてのは難しいだろう。

今後も兄二人には、ぎせ……じっけ……モルモツ……じゃなくて、滅亡の危機を回避するために協力してもらわねば。

あ、そういうえば、腹痛を起こす水魔法には、赤ちゃんの腹痛を意味する英単語から取って【コリック】って名前を付けた。

さらに、どうにも暑くて水魔法でなんとか出来ないかと試行錯誤^{さくご}した結果、氷魔法を取得したみたい。

この魔法は、暑い夏には必要だったのだ。仕方ない。

とりあえず【クーラー】という自分の周囲の温度を下げる魔法を作って、余りあるMPを消費してみたんだが……使いすぎて夏が終わる頃にはレベルが5まで上がってしまった。

そして季節が流れて冬になった頃、朝方の寒さに負けた俺は、意図せず火魔法を取得してしまった。

これも水魔法と同じ理由。単純に寒かったのである。

【ピーター】という温度を上げる魔法を作り、結果として冬が終わる頃には火魔法のレベルが5になっていた。

ちなみに【隠匿】はとても有用なスキルだった。

このスキル……どうやら俺が魔法とかスキルを使う時に隠したいと念じることで、効果や影響を隠せるっぽい。

とはいえ、ステータスを隠したりするのは出来ないみたいだ。

すごく残念である。

こんな訳で、俺のレベルとステータスはどんどん上がってしまうので、それを防ぐためにも今は寝ていなければならないのだ。

……では、早速……おやすみなさい。



異世界に転生して、三年が経った。

三歳になっても相変わらず一日中昼寝しているだけの俺に、ローラの堪忍袋の緒がとうとう切れ、

勉強会が行われることになった。

今は部屋で算数と文字の勉強中である。

とはいえ、算数は一瞬で暗算出来るレベルの問題だし、文字についても【言語対応】スキルで理解できてしまった。

しかし、ポンポンと答えるのはやめている。

天才だとおだてられるのは気恥ずかしいし、目立つことで周囲から変な期待を寄せられても困る。こうして、俺は全く分らない子供の振りをするという結論に至った。

しかし、これが本当に……つらく、疲れるのである。

「この石を六個、ユーリ様が持っています。その中から二個を私にプレゼントしてくれました。では、残りはいくつでしょう？」

こんな感じで、ローラが一生懸命教えてくれるのは嬉しいのだが……つらいです。

どうしたものか……とりあえず、すぐ答える訳にもいかないし。

「ん」

問題を解く振りをして、別のことを考えることにした。

まあ、勉強会を通じてローラに気軽に質問出来るようになったのは、数少ない利点だ。

そのおかげで、この世界のことの色々と分かってきた。

この世界には、俺の住んでいるガートリン領のあるクリムゾン王国を含めた四つの大きな国が存

在し、それぞれが冷戦状態で常に睨みあっているらしい。

この四つの国、もともとは一つの国だったが……三百年ほど前に分裂したそうだ。

最近では冷戦状態も緩和の兆しが見えてきて……徐々に人や物の交流が進んでいるという。

そんな訳で……魔法やスキルの知識もゆるやかに拡散され始めて、どんどん発達しているんだとか。

そうそう、スキルといえば……。

最近、本館の玄関に飾られていた大きな絵画を眺めていた時、塗り方が随分と雑だったので偽物では？と疑問に思った瞬間、俺は【鑑定】スキルを取得していた。

なんぞこれ？と、適当に周りのものを観察してみたところ、色々な情報が分かる超便利なスキルであることが判明した。ちなみに、玄関の絵は贋作という悲しい結果に。

ああ……それから二歳から三歳にかけて【クラー】や【ヒーター】を使っていたら、氷魔法と火魔法がレベル8まで上がっていた。

ちなみに今のステータスはこんな感じだ。

ユーリ・ガートリン レベル3

HP 224／224 MP 233／233

攻撃力 406 防御力 333

スキル 【超絶レベル8】【言語対応レベル5】【隠匿レベル9】

魔法 【水魔法（小）レベル2】【氷魔法（小）レベル8】【火魔法（小）レベル8】

——さて、そろそろローラの問題に答えを出さないと。

「えっと、四つかな？」

俺は十分に時間をかけて、ローラの質問に答えた。

「はい、正解です。よく分かりましたね。偉いですよ。ユーリ様……じゃ、次の問題ですよ」
……拷問はまだまだ続くようだ。

幕間の物語 ローラの日常1

こんにちは、ユーリ様専属メイドのローラです。

これは、ユーリ様が四歳になって間もない頃のことです。

ガートリン男爵家の三男としてお生まれになったユーリ様は、本館の屋敷から少し離れた別館にて生活を送られています。

どうやら、お館様は正妻のサリー様の目からユーリ様を離れたかったようですが……。

その別館は古く寂れており、使用人の数も少ないために手入れが行き届いておらず、警備もカットとピートの二人だけです。

これじゃあ、いくら養子とはいえ……不憫でなりません。

まあ、愚痴をこぼしても仕方ないですね。

気分転換に、ここ最近のことについて話しましょう。

私はユーリ様に文字や算数を教えているんですが、頭のよさと言いますか……理解力については普通くらいだと思います。

ただ、たまに教えていないことを、唐突に口にするのが不思議なんですけど……。

それと、お館様が思ってもみなかったことを仰ったんです。なんと、今日からユーリ様に剣の稽古を始めさせるとか。

突然のことに驚いていたのですが、さらにディランさんが指導されると聞いて、二度、驚きました。というのも、ディランさんはお館様の警護を担当している元冒険者でして、相当お強いと聞いております。

そんな彼がユーリ様の指南役になった理由は……ユーリ様に自立出来るような力を身につけて欲しいとお館様がお考えになったからかもしれません。

とはいえ、ディランさんの口の悪さまでは学んでほしくはないですけど……。

あっ。そろそろ、ディランさんを案内しないと。

こうして今、屋敷の本館からディランさんを案内して別館へとやってきました。

「別館に顔を出すのは何年振りだろう……。意外ときれいだな」

「使用人の数は少ないですが、最低限の手入れはしておりますので」

「しかし、お館様も……分かんないな。指南役なんて俺より適当な奴が沢山いるだろうに……俺も暇ではないしなあ」

「恐らく、剣術の腕を買われてのことかと……」

ただ、男爵家に仕えている兵士の中には、剣道場の次男や三男みたいな方もいらっしやいますか

ら……そういった方々の方が適任かもしれませんね。

「それに、三男のユーリ様とは会ったことないんだわ。長男と次男がアレだから……三男も同じようなもんか？」

「違います！ ユーリ様は……あのお二人とは……あっ……すみません」

赤ちゃんの頃から身の回りの世話をしていたからでしょうか。

ユーリ様のことになる、少々、熱くなってしまう。

「くく、メイドにそこまで言わせるとは……俺も会ったのが少し楽しみなってきたぜ」

こうしてディランさんを中庭まで案内したところ、ユーリ様は芝生で横になってお昼寝なさっていました。

「あ、イーナさん。ユーリ様を見てくださって、ありがとうございます。変わりはありませんでしたか？」

ユーリ様の横には、メイドのイーナさんがいらしていました。

「何もなかったです。あそこですとお昼寝なさっていたのです」

「そう……ありがとうございます。仕事に戻ってください」

「はいです」

イーナさんを見送ると、心の中で小さくため息をついてしまいました。

ユーリ様はどこにいても寝てばかり……やっぱり何かの病気なのかしら……。

「あそこで寝ているのが……ユーリ様か？」

振り返ると、ディランさんが何やら真剣な表情になっています。

「ええ、そうです。いつもあそこでお昼寝……って、ディランさん!」

私の返事を聞くなり、ディランさんは木刀を片手にユーリ様に向かって走りだしました。

「じっ!」

そして、寝ているユーリ様目がけて、木刀を思いっきり振り下ろしたのです。

——ガッ!!

その一閃をユーリ様は寝返りをうつことで躲かしました。

驚くべきことに、木刀は地面にめり込んでいます。

「なん……だと……!？」

ディランさんが再び木刀を振り下ろしましたが、ユーリ様は再び寝返りをうつて、避けました。すると、ユーリ様の目がぱっちり開いて……。

「うるさい」

と、近くにあった小石をディランさんに投げつけました。

「……っ!？」

ディランさんはすんでのところで躲しましたが、その勢いで、尻もちをついてしまいました。ユーリ様の方を見ると、何やらブツブツと呟いています。

「……剣を向けて俺の眠りを邪魔するなんて……ローラがいなかったら……」

混乱していた私はようやく落ち着きを取り戻し、急いでユーリ様とディランさんのところへ駆けつけました。

「こ、これは……どういうことですか!? 剣術のことは分かりませんが、ディランさんの一振りはユーリ様が死んでしまうようなものだったかと! それに……稽古をつけるにしても……ユーリ様は四歳になったばかりの子供です! 大人なら手加減というものをですね……!!」

ディランさんとユーリ様を交互に見ながら、精一杯の力で注意したのですが……ディランさんは私のことなど意に介さずに、ユーリ様を見据えて問いかけています。

「坊主……お前、本当に四歳かよ……」

寝ぼけまなこのユーリ様はしばらく私を見てから、ディランさんに視線を向けると、何やら納得したような表情に。

「そうだよ。ああ、そうか……おっさんがローラの言っていた剣の稽古をつけてくれるっていう」

「おっさん……俺は、まだ三十代前半だ。おっさんではないが……そうだよ。俺が稽古をつけてやるよ」

「あ、もしかして……これから稽古なんて野暮^{やぼ}ったいことは言わないよね? 今日はいい天気なんだ。外で日向ぼっこしないなんて、人生損するよ?」

「今日……いや、今からやる。すぐに動きやすい格好に着替えてこい」

「うへ……はあ。まあ剣術は学んでおきたかったし仕方ないか。ローラ、行くよ」

先ほど殺されかけたにもかかわらず、ユーリ様は普段通り部屋に戻って、お着替えをなさってます。

「ユーリ様」

「ん?」

「ユーリ様……ディランさんは危険です。やはり、剣術の稽古は別の方をお願いした方がいいかと。お館様には私から伝えておきますので」

「ん? なんて? 俺は彼でいいよ? ……屋敷の中で一番の実力者で元冒険者なんだろう? それにさっき分かったけど、この家にいることが不思議なくらいの凄腕^{すごて}じゃないか。彼に稽古をしてもらうのが一番効率的だし、面倒くさくないんじゃないかな?」

そう言うと、ユーリ様は修練場に行ってしまった。

それでも、やっぱり心配だったので、こっそりと修練場を覗きに行くと……。

ユーリ様とディランさんは、まるで兄弟のように笑っていました。

男の人って分からないって思いつつも少しだけ……ディランさんに嫉妬^{しつと}してしまったのは、ユーリ様には内緒です。

異世界での四度目の春を迎え、俺の身体も少しだけ大きくなった。

「ユーリ様。ユーリ様、起きてください。ユーリ様」

「んん。あと二時間だけ」

四歳になっても、いつもと同じようにローラが起こしにきてくれるなんて、やっぱり貴族は最高だ。
「二時間って……剣術の稽古の時間が終わってしまいますよ。旦那様から稽古はサボらないように
言われていますよね？」

「うぐう……じゃあ、風邪っぽいし……」

「風邪かどうかは私が見ていますので、ご心配なく。さあ起きてください。そんな様子で
すと、私から旦那様に報告しちゃいますよ？」

「うぐう……ローラが優しくない。俺、まだ四歳なのに」

「我慢してください。ガートリン男爵家は、代々武門の誉れ高い家柄……家督を継ぐことが難しい
としても……ガートリン家の名に恥じないように稽古に励んでくださいな」

「クハア……仕方ないなあ……」

しぶしぶ起き上がり、ローラが俺にタオルを渡してくれたので顔を拭く。

それから準備してくれていた服に着替えていると、ローラは寝癖が気になったのか、濡れタオル

